ちびっこ

錬金術師の恩返し

4

るあか ruaka

ill. 81無理無理芸人

登場人物紹介



パーシヴァル

聖騎士団の団長。普段は真面目だが、妹のエミリアのことになると暴走しがち。

エミリア

道具屋を経営している女性。実はラインツ国王の姪っ子で、王家の一員。

イリーナ

『魔道伯（まどうはく）』の称号を持つおばあさん。魔道大国マギラナで研究を行っている。

クリスティーナ

ザイラール共和国の元王女。女神の神託を聞く力を持っている。

ジル

『錬成堂グランキャット』を営む錬金術師。不器用ながらも愛情を込めてノエルを育てている。

ノエル

本作の主人公。病で命を落とした少年が幼児に転生し、今の姿に。幼くても錬金の才能はピカイチ！

くろすけ

ノエルの相棒のしゃべる黒猫。ノエルを一人前の錬金術師にするべく、奮闘中！

冒険者パーティ『黒豹』のメンバー

リオン

アイラ

ジャック

1話　僕の日常

ここはラインツ王国の国境の町ブライア。すぐ隣（となり）のザイラール共和国に近いこともあり、たくさんの冒険者が訪れる賑（にぎ）やかな町だ。

僕はノエル・グランヴィル。四歳。

ブライアの町の大通りにあるお店、『錬成堂（れんせいどう）グランキャット』に住んでいる。

出かける準備をして一階のお店へ降りると、お父さんが接客を終えてお客さんを送り出すところだった。

「今日もありがとな、ジルさん。んじゃ、また来るからな」

冒険者のおじさんが笑顔で言う。

「ありがとうございました。また、いつでも錬成しますので」

そう言うお父さんの隣に並び、僕も「ありがとーございました！」と話しかける。

「おー、ノエル君じゃないか。ノエル君もまたな」

「うん、ばいばーい！」

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

お父さんと二人でおじさんを見送った。
僕のお父さんジル・グランヴィルは、錬金術のお店を経営している。
錬金術の素材を持ってきたお客さんに、代わりに道具を錬金してあげたり、装備に攻撃力アップなんかのバフを付けてあげたりするお仕事だ。
お父さんは元ザイラール王国の魔道軍大将ってすごい人だったんだけど、今は訳あってここでお店をやっている。本当は、めちゃくちゃ強いんだから。
「あれ、ノエル。くろすけは？」
「なんか窓の前で寝てて起きなかったから、置いてきた」
僕がやれやれと首を振ると、お父さんはぷっと噴き出した。
「……もう、すっかり猫だな」
「うん」
顔を見合わせて笑う。
すると、くろすけがトントンと軽快に階段を下りてきた。
『ノエル、行くときは起こせと言うたじゃろうが』
そう、ジジ臭い口調で念話を送ってくる。
僕と黒猫のくろすけは、念話で会話ができる。僕の『超能力』のおかげだ。
最近、お父さんも僕を通してくろすけの声が聞こえるようになった。

「起こしたよ。でもくろすけ『ワシは偉大な錬金術師じゃあ……』って寝言言って起きなかったから」
僕が渾身のモノマネを披露すると、お父さんだけではなく道具屋のカウンターにいるエミリアもふふっと笑った。
エミリアはラインツ王国の王族で、公爵令嬢。
だけど、お父さんに協力をして道具屋をやってくれている。
この錬金屋と道具屋、二つ合わせて『錬成堂グランキャット』だ。
『なんじゃと!?』
口をあんぐりと開けて驚くくろすけ。
全く、ゆすってもびくともしなくてこっちがびっくりだったっての。
ちなみに、くろすけが寝言で言ってた『偉大な錬金術師』っていうのは本当。
くろすけは、僕の錬金術の師匠だ。元はゼオル・グランウィルという人間で、お父さんのお父さん、つまり僕のおじいちゃんなんだよね。
そんなくろすけは置いておいて、僕は道具屋のカウンターにぶら下がるようにしてエミリアを覗いた。
「ねぇ、ねぇ、エミリア。今日もナダ茶一個、持っていってもいい？」
「ええ、良いわよ。はい、どうぞ」

エミリアは商品棚からお茶の袋を一つ取って、僕に手渡してくれた。
「ありがとう！　じゃあ、アジト行ってくるから。いくよ、くろすけ！」
「にゃぁ！」
「はいはい、いってらっしゃい」
「頑張ってね。小さな錬金術師さん」
お父さんとエミリアに見送られ、僕とくろすけはお店を飛び出した。
お店の前には、いつものようにリオンが立っている。
ラインツ聖騎士団の一員で、エミリアの近衛兵だ。
「リオン、行ってきます！」
「にゃ！」
「おう、気を付けてな」
彼にバイバイと手を振って、大通りへと出た。
すると、大通りの向こうの方からいつもの三人が大きな袋を抱えて歩いてくる。
お父さんが錬金で使う素材を集めてきてくれたんだ。
「おーい、みんな、おかえり～！」
「にゃー！」
僕が大きく手を振ると、赤髪の二人も大きく手を振り返してくれる。

アイラとトーマ。この二人は姉弟。
もうひとりの大男のジャックは、「よっ」と軽く挨拶をする程度だった。
錬成堂グランキャットを拠点に活動している、冒険者パーティ『黒豹』。
さっきのリオンも聖騎士と冒険者を兼任していて、黒豹のメンバー。
今は四人で活動をしている。
トーマは最近入った新人冒険者。本当はもうひとり、クーガもいたんだけど、彼は今隣国の騎士学校に留学していていないから、冒険者はお休み中。
今までトーマ兄ちゃんとクーガ兄ちゃんって呼んでたんだけど、黒豹のメンバーになって一緒に住むことになったし、呼び捨てにするようになったんだよね。
今では彼らも大事な家族だ。
「今日もアジトに行くのかい？」
アイラが問う。
「うん。今日もナダ茶と戦ってくる」
僕がそう返すと、三人はあっはっはと笑った。
「てめぇ、懲りねぇな。そろそろ諦めろ」
ジャックが言う。
「嫌だねー。僕は諦めないもんね」

僕は彼に対し、べーッと舌を出した。
「ノエル、アタシも後で行くからね」
「うん。アイラ、ありがと」
アイラはいつも僕のお守をしてくれる。頼れる姉御だ。
「頑張ってな、ノエル。成功したら俺にも飲ませてくれ」
「うん！　楽しみにしてて！」
僕はトーマにニッと笑いかけた。

◇

彼らに別れを告げてたどり着いたのは、町の片隅にあるボロボロの小さな小屋。
黒豹が倉庫代わりに使っていたアジトで、今では僕の錬金工房だ。
小屋の真ん中には、立派な錬金鍋が置かれている。
僕のお父さん手描きのくろすけのイラストが彫られた、世界にひとつしかない最高の錬金鍋。四歳の誕生日に、お父さんがプレゼントしてくれたんだ。
そう、僕も錬金術師なんだよね。
このことを知っているのは、グランキャットのみんなと一部の人だけなんだけど。

少し前に、僕はくろすけやみんなと協力してすんごい魔導具を錬金して、隣国の悪い人をやっつけたんだ。
その後に『同盟記念祭』っていうラインツとザイラール両国の仲良し記念のお祭りが開かれてさ。
これは、その同盟記念祭から、二ヶ月後のお話――

2話　苦いラスボス

ナダ茶――
それは、ザイラール共和国にあるジャックの故郷『ナーダ村』で栽培されているお茶の葉。
とっても栄養があって、特にお年寄りに人気の健康食品。
ジャックが定期的に故郷に茶葉を取りに行ってくれるから、グランキャットの道具屋でも売れるようになったんだ。
――でも、ひとつ重大な欠点がある。
「おぇぇ……ダメだ、全然苦い……」
僕はティーカップから口を離し、口をへの字に曲げた。
『ふむ、また失敗か……』

くろすけも僕の隣で、小さなため息をつく。
そして、爪にちょんちょんと黒いインクを付けて、材料の書いてあるメモにバツ印をつけた。
僕が何をしているのかというと、ずばりナダ茶の改良。
お年寄りはみんな口を揃えて「この苦さがいいんじゃないか」って言うんだけど、僕からしてみれば正直苦すぎて飲めたもんじゃないんだよ。本当に。
だから、僕は最近ずっとこのナダ茶と戦っている。
初めは錬金するんじゃなくて、普通に砂糖やハチミツを混ぜてみた。
でも、砂糖やハチミツの甘さとナダ茶の苦さが完全に分離して、「あま、にっっが！」って両方の味が同時に襲ってくることになって、なんだか舌がおかしくなりそうだった。
牛乳を混ぜてもダメ。カフェラテみたいに苦さがマイルドになることもなく、もったりした牛乳の味わいの後に、この世の終わりかのような苦さが押し寄せてくるんだ。
甘いものを混ぜたら甘くなる理論は、このナダ茶には全く通用しない。
それで、今みたいに、錬金術でナダ茶の茶葉自体を改良しようってことになったんだ。
「おっ、やってるねぇ、ノエル」
アイラがアジトに入ってきた。
「うん。でも、全然だめ。これあげる」
「どれどれ……」

アイラが僕があげたティーカップに口を付けると、その時点で「あはは、こりゃ、ナダ茶だね」と笑ってしまっていた。
「そうなんだよ、どこまでいってもナダ茶なんだよ……」
ガーンと項垂れる。
「今回は何と錬金してみたんだい？」
「あのね、マンゴー」
「マンゴーかぁ……それも、このナダ茶の深みに消えていっちまったんだねぇ……」
アイラが不思議そうにティーカップを覗き込む。
ただの透き通ったお茶が入っているからだ。
「くろすけに鑑定してもらったら、ちゃんと名前は『マンゴー成分配合ナダ茶』ってなってるんだけどね……」
くろすけには『鑑定眼』というスキルがある。
物の名前を調べたり、ステータスを見たりできる優れものだ。
「でも、混ぜた時と違って錬金すると味がなくなる……と。不思議だねぇ」
「うん……そろそろ、魔草も試してみようかな……」
魔草とは、魔力のこもった野草のことだ。
「薬草とか？」

そう言うアイラに、僕はうんとうなずいた。
「薬草だけじゃなくて、例えば薬草と砂糖を両方入れてみるとか……」
「なるほど。まぁ、身体に悪いもんじゃなきゃ、何混ぜたっていいからね」
『しかしノエルよ。あまりたくさん混ぜすぎると、完成形の想造もしづらくなるぞ』
そうくろすけの念話が聞こえてきて、僕は「そうなんだよね」と相槌を打った。
「ん？」
アイラにはくろすけの念話が届かないためか、彼女は首を傾げた。
「あのね、錬金術に大事な最初の工程に、『想造』っていうのがあるでしょ？」
「うんうん。確か、出来上がったものの構造をしっかりと理解して思い浮かべることだったね？」
アイラは錬金術師ではないのに、僕の修業に付き合い過ぎて詳しくなっている。
「そう、その通り。だから、あんまりいろんなものを混ぜすぎると、想造がしづらくなるって、くろすけが……」
想造ができないと、錬金自体が成功しない。
逆に、錬金が成功している時点で想造はできているってことなんだけど……
「ははーん。確かにね……」
アイラはうーんと考えながら、ナダ茶をすすった。
僕はここできゅぴーんと閃く。

「そうだ。それ自体に甘味のある魔草、何か知らない？」
「……ぐるにゃ」
くろすけが難しい顔をしながら不満そうに鳴く。
念話でも『特に甘味に関してはあまり意識して使うことはなかったからのぅ……』と聞こえてきた。
「うーん、料理の隠し味に使うような調味料系の魔草なら、何かあるかもねぇ……」
「おぉ、調味料系の魔草かぁ！　片っ端から試してみてもいいかも……」
そうと決まれば早速行動。
僕とくろすけとアイラは三人で市場へと行き、調味料として魔草を売っているワゴンから複数の魔草を買った。
アジトにとんぼ返りして、早速錬金。
――しかし。
「ダメだー！」
僕はできたもののよく知った苦さに、ガクッと膝を突き、四つん這いになった。
「んー、どれもナダ茶だねぇ……あっ、でもこれ、ちょっとコクがあるような……いや、気のせいか……」
アイラもしみじみとした表情でいろんなナダ茶を飲み比べてくれたけど、やっぱりダメそう。

僕たちの隣で、くろすけが材料のメモに静かにバツ印を書いていた。
「こうなったら、こうだ！」
僕はありったけの甘味のある食べ物や魔草を錬金魔法陣の上に載せて、錬金をした。
すると、初めて違うものができあがる。
『ふむ、「やけくそ茶葉（ちゃば）」と出てきたのう……』
「やけくそ茶葉!?　なんかダメそうな名前……！」
僕のその言葉に反応し、アイラは飲んでいたナダ茶を「ぶっ！」と噴き出した。
『うむ。ステータスを見ると、ナダ茶の健康成分が全て消えておる。これは、完全に別のものになってしまったのう……』
「ぐはっ……」
僕は床に突っ伏した。
「もー！　なんでできないのー!?　この、ラスボスめー！」
悔しくて、そう叫びながらアジト中の床をゴロゴロと転がり回る。
「ラスボスって、ダンジョンの魔物じゃないんだから」
あっはっはと笑うアイラ。
「ぐぬぬ……くそぅ、いつか倒してやるぞ、ナダ茶……」
床に寝転がったまま、じたばたと手足を動かす。

「なんでノエルは、そうまでしてナダ茶を甘くしたいんだい？」
アイラが問う。
僕は駄々をこねるのをやめて起き上がり、こう答えた。
「だって、せっかく体に良い健康食品なんだよ？　お年寄りだけじゃなくて苦いのが苦手な人でも飲めるようになったら、たくさんの人が健康でいられるでしょ？」
アイラは、「そうだね」と優しく微笑んだ。
くろすけもうんうんとうなずく。
「だから、僕は絶対にこのラスボスを倒してみせるんだ……！」
「大丈夫。誰かのために頑張ってるノエルは最強だって、アタシは知ってるからね。きっと、倒せるさ」
「にゃ♪」
今日のところはラスボスを倒すのは諦めて帰る、僕たちなのであった。
これから起こる一連の騒動が、最終的にラスボスを倒すことになるなんて、この時の僕は思いもしなかったんだ。

3話　魔法の国からの招待状

グランキャットに戻ると、ラインツの聖騎士がお父さんに何かを届けにきていた。
「それでは、確かにお渡ししましたので。私はこれで失礼します」
「あぁ、ありがとう。ご苦労様」
お店から去っていく聖騎士は、すれ違う僕とアイラを見て会釈をしてくれた。
アイラも会釈を返し、僕は「ばいばーい」と手を振る。
「パパ？　おーさまからお手紙？」
紙筒を持っているお父さんを見上げて、そう尋ねる。
「お、おかえり。いや、どうやら王様からではないらしい……」
「えーっ、違うの？　じゃあ、パーシー？」
パーシーとは、ラインツ聖騎士団の団長のパーシヴァル・クラウディスのこと。
ラインツ国王の甥で、エミリアのお兄さんだ。
ラインツ最強って言われていて本当にすごいんだけど、妹のことになると、ちょっとね……
「あのパーシーが、パパにお手紙なんかくれると思うか？」

「えっと……思わない」
パーシーがお手紙をくれるのなら、たとえお父さんに用事があってもエミリア宛で送ってきそう……
僕とお父さんは顔を見合わせて笑った。
「じゃ、誰からだったのさ？」
アイラが問う。
「おう、もう店も閉めるところだし、二階でみんなで確認しようか」
「はいよ」
「じゃあ、僕、ひっくり返すね」
僕はお店の看板を『ＯＰＥＮ』から『ＣＬＯＳＥ』へとひっくり返した。

二階のリビングにみんなが集まった。
そのお手紙はお父さん宛だったので、まずはお父さんが一人で中身を確認する。
「えー、俺なんかが……ほら、正式な招待状だからみんな見ても大丈夫だぞ」
お父さんがそう言ってテーブルの上に堂々と手紙を置いた。
みんな興味津々に覗き込む。
それは、『マギラナ国』という国からの、『魔道研究発表会』への招待状だった。



「まぁ、おじさまが仰っていたのはこのことだったのね……」
エミリアが言う。おじさまって、ラインツ国王のことだね。
「ん？　エミリア、何か聞いてたのか？」
お父さんが問う。最近、お父さんだけじゃなくて、アイラやジャックも『エミリア』って呼び捨てするようになったんだよね。
今までは公爵令嬢だからって気を遣っていたらしいけど、エミリアだってこの家の家族だもん。
「ええ、実は……少し前におじさまに聞かれたことがあって。『マギラナから招待を受けたのだけれど、国を代表して数名参加させたい。誰か相応しいと思う人はいるか？』って……だから私、ジルさんを推薦したの」
エミリアはそう言って、てへっと笑った。
お父さんは諦めたような表情を浮かべる。
「ちょ……なんか一言言ってくれても……」
「ごめんなさい。まだ推薦の段階だったから、ちゃんと決まったら言おうと思っていたのよ。でも、私、あなたを推薦したこと、後悔していないわ。だって、ジルさんは元ザイラールの魔道軍大将ですし、この国にも多大な貢献をした功労者であることに変わりはありませんもの」
エミリアにお父さんのことをそう言ってもらえて、なんだか僕が照れてしまった。
「そうだよ！　パパはすごい人だから、おーさまもエミリアの推薦の通りにしたんでしょ？　おー

さまだって、パパが良いって思わなかったら、他の人を選んでたはずだもん！」
僕が大きな声でそう言うと、みんな微笑みながらうなずいてくれた。
お父さんも、ふっと笑顔になる。
「……なら、せっかくだし、行ってくるか。でも、このもう一人の参加者と一緒ってのが、辛いな……」
お父さんが視線を落とした手紙の先には、『パーシヴァル・クラウディス』の名前が。
「あーっ！　パーシーも参加するんだ！　パーシーとパパの二人ってこと？」
「みたいだな……『なぜエミリアではなく、貴様なのだー！』って、ずっと言われ続けなきゃいけないかと思うと、憂鬱だな……」
げんなりするお父さんをよそに、みんなは声を合わせて「言いそう！」と大笑いした。
「……でさ、マギラナ国って、どこにあるの？」
僕が尋ねると、お父さんがうなずき答えてくれた。
「あぁ。『魔道大国マギラナ』っていってな、ザイラール共和国のもっと向こうにある国だ。ここは王様の代わりに『大魔道卿』って人が国を治めてるんだぞ」
「だいまどーきょー……なんかかっこいい……」
それに、魔道大国ってことは、魔法がすごいってことだよね……
僕の興味津々な表情を見てか、エミリアがこう続けた。

「ほら、同盟記念祭の時に、魔法サーカス団が来てくれていたでしょう？　あのサーカス団も、マギラナから来てくれていたのよ？」
『魔法サーカス団』という言葉を聞いて、僕は同盟記念祭の時の魔法のサーカスショーを思い出した。
光る玉に乗ったピエロに、魔法でできた猫。
その猫は鳥に変わってリボンに変わって、最後には花びらになってキラキラ舞ったんだ。
僕、一瞬であのサーカス団のファンになっちゃったんだよね……！
「えーっ！　魔法サーカス団の国!?」
うわ、急に行きたくなっちゃった……
お父さんとパーシヴァル、二人だけでずるいなぁ。
「あー、こいつ、行きたくなってやがる」
ジャックがそう言ってニヤリと笑った。
「ぐぬぬ……」
その図星の一言に、僕はたじろいでしまった。
アイラとかに言われるんなら許せるけど、ジャックに言われたってのがちょっと気に入らない。
エミリアが途端に手を口に当てて、しまったという顔をする。
「……ごめんなさい。言わない方が良かったかしら……」

「ノエル。今回はパパたちだけで行かなくちゃだけど、またいつかお店の長期休暇が取れたら、みんなでマギラナに旅行に行こうな」
さすが、お父さん……！
良いこと言う！
僕は、元気よく「うん！」と返事をした。
大丈夫、今回行けなくたって、またみんなで旅行に行ったらいいんだ。
だから、僕は大人しくお留守番をするよ。
その僕の納得した表情に安心したのか、エミリアはホッと息をついた。

4話　旅立ちと懐かしい声

――数日後。
お父さんのマギラナへの旅立ちの日。
一台の馬車が、お店の前で停まった。
カラン、コロン。
勢いよくお店のドアが開くと、パーシヴァルが入ってきた。

彼はなぜか怒っていて、ズンズンとお父さんへと詰め寄る。
そして、グイッと胸倉を掴んだ。
「なぜエミリアではなく、貴様なのだー！」
言った！
パーシヴァル、お父さんが予想してたセリフ、一字一句そのまま言った！
周りのみんなは手を口に当てて、ぷっと噴き出しそうになるのを必死に堪えていた。
でもくろすけは、パーシヴァルに聞こえないのをいいことに、念話で『クックック……』と笑ってくる。
ちょっと、やめてよくろすけ。
僕とお父さんには聞こえてるんだからね？
そのせいで、僕も堪えきれずに「あははは っ！」とお腹を抱えて笑ってしまった。
みんながヤバいぞ、という顔でこちらを見る。
そりゃ、ちょっと前までパーシヴァルは雲の上の存在だと思っていたからね……
でも、みんな、大丈夫だよ？
本当はそんな、怖い人じゃない。
「ん？　ノエル。私は何かおかしなことを言っただろうか？」
パーシヴァルがきょとんとした顔で僕を見つめる。

僕は、ブンブンと首を横に振った。
「ううん。なーんにも。いつも通りのパーシーだね！　僕ね、パーシーのそういうところ、好きだよ♪」
そう言ってニッと笑う。
嘘じゃないよ。僕、パーシヴァルだって、家族みたいに大好きだから。
すると、パーシヴァルは頬を赤らめ、胸のあたりから〝トゥンク……〟と音が聞こえてきたような気がした。
彼はパッと手を離し、お父さんを解放する。
「……ふん。ノエルに免じて、今回ばかりは貴様で勘弁してやる。分かったら、さっさと出発するぞ」
パーシヴァルはそう言って回れ右をして、お店を出ていき馬車へと乗り込んだ。
途端に、お父さんは「ノエル～、ありがとな！　お前のおかげであの言葉は一回聞くだけですみそうだ～！」と言って、僕をめちゃくちゃに撫でまわして褒めちぎった。
「あはは、良かったね。パパ……」
でも、パーシヴァルもそんなにお父さんと一緒に行くのが嫌なら、わざわざお店に寄ったりなんかしないでひとりで行けばよかったのに。
お父さんたちのお見送りのため、みんなでお店の外へと出る。

そして、僕はパーシヴァルにこう尋ねた。
「なんでパーシーは、わざわざパパと一緒に行こうと思ったの？　ひとりでお馬さんに乗って行った方が、早く着かない？」
「ん？　なぜなら、この店に寄れば、エミリアやノエルにお見送りをしてもらえるからな」
パーシヴァルは、そう言ってなんでもないように「ははは っ」と爽やかに笑った。
苦笑いの一同。
……えっ!?　この人、妹にお見送りをしてもらいたいがために、お父さんを迎えにくると見せかけてお店に寄ったの!?
やっぱり、ヤバい人だ……
でも、エミリアだけじゃなくて『ノエル』とも言ってくれたのがちょっと嬉しかったのは、みんなには内緒。
なんとマギラナまでは馬車を乗り継いで片道五日かかるそう。
だから、お父さんが帰ってくるのは早くて十日後。
二人が乗った馬車がゆっくりと動き出す。
「パパー！　パーシー！　いってらっしゃーい！」
僕は、馬車が見えなくなるまで両手を振って見送った。
二人とも、喧嘩しないでいられるかな……

◇

お父さんたちが出発してしばらく経った頃。
くろすけと一緒に自分の部屋にいると、僕の『魔導通信器』に連絡が入った。
この魔導具は、携帯電話みたいに色んな人と通話ができる便利アイテムだ。
「はい。ノエルですけど」
『ノエル。クリスティーナです』
連絡をくれたのは、ザイラール王国の元王女、クリスティーナだった。
ザイラールとラインツの両国を救うために、僕と一緒に奔走してくれた優しい王女様。
今はザイラールは共和国になったから王族の権力はなくなったけど、それでも国の『象徴』として国民から愛されているんだ。
「クリス!?　わぁ、久しぶり！　元気だった？」
「にゃにゃー！」
『クリス、久しぶりじゃの♪』
くろすけも鳴き声と念話で二重に返事をする。
クリスティーナはザイラール王族特有の『女神の神託』を受け取れる力があるせいか、くろすけの念話も聞こえるんだよね。
『はい、お久しぶりです。私は元気です♪　ノエルもくろすけも元気そうで』
「うん。元気いっぱい♪　修道士の修業はどう？」
『はい。フィンが、聖教騎士団直属の騎士学校に修道科というのを新設してくれたので、今はわたくしもリンたちと共に騎士学校に通っています。皆で、頑張っていますよ』
フィンは、クリスティーナの元近衛兵。
今は新設された『ザイラール聖教騎士団』の団長さんで、直属の騎士学校の面倒も見てる。忙しそう。
アイラの妹たちもその騎士団の見習いとして、騎士学校に通っているんだ。
「そっか！　クリスだけじゃなくて、リン姉ちゃんたちも頑張ってるんだね」
『ノエルはどうですか？　錬金術の修業には励んでいますか？』
「うん。あのね、最近はずっと、ナダ茶と戦ってる」
『ナダ茶と……戦う!?』
そのクリスティーナの驚いた声に、僕はぷっと噴き出した。
僕がナダ茶の茶葉に攻撃を仕掛けているのを想像してくれていたら、ちょっと嬉しい。
「あのね、ナダ茶を錬金術で甘くする研究をしてるんだけど、全然上手くいかないんだ」
『あっ、そういうこと……！　ナダ茶、実はわたくしも、苦くて飲めないのですよね……ジャック

様の故郷で栽培されているお茶なので、申し訳なくて……』
「でしょ？　でも健康には良いからさ、美味しく飲めたら嬉しいよね」
『はい、そうですね。ミルクを混ぜたりしてもダメなのですよね……ノエルの研究が成功するの、楽しみにしていますよ』
そっか、クリスティーナもなんとか飲んでみようと、努力をしていたんだ。
だったら、彼女のためにも頑張らないと♪
「うん！　僕、絶対ナダ茶を倒すから。そしたら、クリスにも飲ませてあげるね」
『ええ、ぜひ♪　……っと、本日ノエルに連絡をしたのは、少し気になる神託を受け取ったからなのです』
「気になる神託？」
「にゃ？」
僕とくろすけは、なんだろうと首を傾げた。

5話　気になる神託

「気になる神託って、どんなお告げを聞いたの？」

魔導通信器越しにクリスティーナに問う。
『ええ。受け取った神託は――「迷宮の妖精の暴走により、二人の英雄にとてもとても小さな災難が降りかかる」です……』
彼女は困惑気味にそう答えてくれた。
えーっと、ちょっと待って。気になることはたくさんあるけど――
「迷宮の妖精ってなんだろう……」
その疑問に答えてくれたのはくろすけだった。
『お主も何度かダンジョンを攻略したじゃろう。ダンジョンの核を利用して、ダンジョンの構造を作ったのが、迷宮の妖精じゃと言われておる』
「えっ、ダンジョンって妖精が作ってるの!?」
確かに、あんなすごい仕掛け、誰がどうやって作ったんだろうとは思ってたけど……
『人間よりもはるかに大きな魔力を持っており、どちらかと言えばクリスに神託を下す女神様と近い存在じゃとも言えるじゃろう』
「……そんなすごい妖精が、暴走しちゃうの？　ヤバくない？」
人間の手に負える？
とも思ったけど、女神様がわざわざ教えてくれるってことは、なんとかできるってことなのかな？

『わたくしも、くろすけに教えてもらうまで迷宮の妖精がどのようなものなのか、知りませんでした……ですが、これでひとつ分かったことがあります』
「なになに？」
『もうすぐ、隣国マギラナで各国の要人を招待した、大規模な魔道研究発表会があるのですが……』
「あっ、それ知ってるよ。だって、パパとパーシーが招待されたもん。さっき出発した」
『まぁ、そうでしたか！　実はその研究内容が、ダンジョンの構造を利用したものらしいのです』
それを聞いた瞬間、サッと血の気が引いた。
それって、つまり――
「その研究発表会で、迷宮の妖精が暴走しちゃうってこと……!?」
お父さんとパーシヴァル大丈夫かな!?
ここでくろすけが割って入る。
『続きの「二人の英雄にとてもとても小さな災難が降りかかる」という文言も気になるのう。かの迷宮の妖精が暴走したとして、被害は二人に留まり、しかも、とてつもなく小さいということじゃ』
『はい、そうなんです。ですので、騒ぎにするほどの神託ではないのかも、とも思っています』
確かに、クリスティーナがこんな神託を受け取ったとマギラナに抗議した結果、とても些細なものだったら両国の関係に亀裂が入ってしまうかもしれない。
「小さな災難ってなんだろう……あっ、こういう感じかな？　迷宮の妖精が爆食いとかする系で、二人の人の洋服にミートソースが飛んじゃうとか……」
ぷっと噴き出すクリスティーナとくろすけ。
『確かにそれは、小さな災難ですね……！』
『いたずら好きの妖精で、足を引っかけて転ばせたりとかのう』
「あー、ありえる！」
キャッキャと盛り上がる僕たち。
くろすけが我に返り、こう尋ねた。
『しかし、それがマギラナで起こることだとして、なぜクリスに神託が下ったのじゃ？　神託はいつも、お主やザイラールに関わることではなかったのか？』
『はい。わたくしとフィンも、来賓として招待を受けているのです。そろそろ出発しようと思っています』
『そういうことじゃったか』
「そっかぁ。クリスはザイラールの象徴だもんね。じゃあ、パパたちだけじゃなくて、クリスも気をつけないと……」
『はい。ダメもとで女神様にもう少し詳しく分からないかと確認をしたのですが、女神様もこれ以上は分からないようです。ただ、大事には至らないだろうとも教えてくれたのです』
その言葉を聞いて、少しホッとする。

とてもとても小さな災難って言っているし、女神様も大丈夫って言ってるんだから、命の危険とかはなさそう。

「良かった。なら、一応気をつけておいてさ、研究発表会が終わって帰ってきたら、二人の英雄が誰だったのか、小さな災難がなんだったのか、また教えてよ」

『そうですね。現地でジルたちと合流したら、彼らにもこっそり用心するようにと伝えておきます。もしかしたら二人の英雄がジルとパーシヴァル様で、用心していたら未然に防ぐことができるかもしれませんし』

「パパとパーシーが英雄……いや、そうかもしれないけど、クリスとフィンだって、英雄だよ？」

『ふふっ、ありがとうございます。では、念のため用心しておきますね。今回の研究の責任者の方とは面識があるので、その方にだけはタイミングがあればこっそりお伝えしておこうと思います』

その後、他愛もない会話をして、クリスティーナとの通話を終えた。

通話を終えた後も、僕は神託のことで頭がいっぱいだった。

マギラナでの魔道研究発表会で何か起こるのはもうほぼ間違いないだろう。

じゃあ、二人の英雄って誰と誰のこと？

クリスティーナと面識のある人だとして、僕も知ってる人？

とてもとても小さな災難って何？

「あーっ、やっぱり僕も行きたいってわがまま言ったら良かったかな!?」

僕はその場に仰向けに倒れた。

『ほっほっほ。気になるのう……しかし、これぱかりはもう、クリスの続報を待つしかないのう』

くろすけも僕の隣に寝転がる。

「うん……集中できなさそうだし、しばらくナダ茶と戦うのはお休みだな……」

『こういう時は、近所の森で素材集めでもするのが良かろうて』

「そだね。明日アイラに連れてってもらおっと」

『ほっほっほ……』

その日は一日ゴロゴロして過ごしたのであった。

6話　小さな災難

お父さんがマギラナに出かけている間、トーマが店番をしてくれていた。

僕が錬金代行とかしても良かったんだけど、お父さんが呼ばれたのは公務だし、しょうがないよねってことで。

道具屋に並べる用の道具だけ僕が前日に錬金して、錬金代行と錬成は予約をしてもらうことにした。

そんなこんなで、僕はソワソワしたままお留守番生活を過ごす。
クリスティーナからもお父さんたちからもなんの音沙汰もなく、十日が過ぎた。
「うーん、誰も何も言ってくれないね……」
お店のベンチに腰掛けて、魔導通信器を見つめる日々。
「ぐるにゃ……」
くろすけも退屈そうに僕の隣で日向ぼっこをしている。
窓から外を眺めると、警備しているリオンと目が合い、微笑まれたので僕も変顔で応えた。
そんな僕を気の毒に思ったのか、道具屋のカウンターからエミリアが声をかけてくれる。
「もう十日になるわねぇ。パパとこんなに離れるのが初めてだから、寂しいわよね。そろそろ帰ってくると思うのだけれど……」
そういえば、お父さんが『無気力』の状態異常にかかっちゃった時も寂しかったなぁ。
でも、今回はそれとはまた違った心配があるというかなんというか……
神託のことは誰にも言わない方がいいかなと思ってグランキャットのみんなには言ってないから、ちょっと歯がゆい。
トーマも錬金屋のカウンターから、心配そうに僕を見つめてくれていた。
カラン、コロン。
アイラとジャックが日課の素材集めを終えて、お店に戻ってくる。

「ただいまー」
「おう、戻ったぞ」
「「おかえりなさい」」
「おかえりー」
「にゃ」
なんでもない日常のやり取り。
いつもと違うのは、トーマが店番で素材集めには行かなかったことくらい。
「ノエル、今日も気晴らしにカルムの森にでも行くかい？」
アイラが気を遣って声をかけてくれる。
「うーん、どうしよっかな～」
――その時だった。
カラン、コロン。
「ごめんくださーい……」
そう言って顔を覗かせたのは、クリスティーナだった。
「クリス！」
「にゃ！」
「まぁ、クリス様！」

エミリアの顔がパッと明るくなる。
「おっ、クリス様じゃないか。弟と妹たちがいつもお世話になってます」
「こんにちは。弟たちがお世話になっています」
アイラとトーマの姉弟はペコリとお辞儀。
クーガも妹たちも、みんな聖教騎士団の騎士学校にいるからね。
「おう、久しぶりじゃねぇか」
ジャックは軽く、よっと片手をあげた。
親戚の子どもじゃないんだから……
「はい、皆様ご無沙汰しております……」
しかし、クリスティーナはお店のドアから顔を覗かせたまま、気まずそうにして中に入ってこようとしない。
……なんだか、嫌な予感がする。そのため、僕はこう尋ねた。
「クリス、長旅お疲れ様。パパとパーシーとは一緒じゃなかったんだ？」
クリスはギクッと、より一層気まずそうな表情になる。
「もちろん、現地で会ってからずっと一緒でした……というか、今も一緒です……ノエル、皆様、どうか落ち着いて聞いてください。小さな災難が降りかかるという英雄は、ジルとパーシヴァル様だったのです」

一同は「小さな災難？」「英雄？」と首を傾げた。
だって話してないんだから、なんのこっちゃだよね。一方で、僕とくろすけは冷や汗を垂らす。
「えっと……二人に何があったの……？」
恐る恐る尋ねた。
「はい。実際に見てもらった方が早いかと思います」
クリスティーナはそう言ってドアから顔を引っ込めると、お店の外で「フィン！　ジル君とパーシー君をこちらへ！」と叫んでいた。
「ジル君？　パーシー君？」
僕たちは各々顔を見合わせ、声を揃えてそう復唱する。
すると――
カラン、コロン。
「皆様、ご無沙汰しております……」
フィンが――二人の赤ちゃんを抱いてお店の中へと入ってきた。
続けてクリスティーナと、口をあんぐり開けて赤ちゃんに目が釘付けになっているリオンも入ってくる。
クリスティーナは、心底気まずそうにこう言った。
「……わたくしも、初めは信じられなかったのですが……ジル君と、パーシー君です……」

「えっ……？」
固まる一同。
僕の思考も完全に停止した。首は据わっていて、二人ともおしゃぶりをしている。
パーシー君はぐずぐず泣いていて、おしゃぶりがぽろっと落ちた。
その瞬間、「えみみあ～！　あぅ、えみみあ～！」と大声で泣きだす。
なんか、めちゃくちゃ泣き虫になってるけど、シスコンは健在だ……！
ジル君の方はおしゃぶりをしたまま、すこぶる機嫌が悪そうにむっすーとしている。
そして、僕と目が合うとぶっきらぼうに「あい」と片手を挙げた。
みんな目を見開き、みるみるうちに驚きの表情へと変わっていく。
一瞬しんと静かになる。
そして――
「えええええ～っ！」
今までにない驚きの声が、お店中に響き渡ったのである。
とてもとても小さな災難って、事の大小の話じゃなくて、とてもとても小さくなる災難ってこと!?

7話　妖精の暴走

「ど、どどどうしましょう、どうしましょう……！」
意味もなくお店中を歩き回るエミリア。
「こりゃまた、えらいちっちゃくなっちゃって～。ノエルのちんまい時を思い出すねぇ」
アイラは不機嫌そうなジル君のほっぺをむにっと突っつく。
ジル君から「ん」と声が漏れた。
えっ、僕ってこんなむっすーってしてた!?　してなかったよね!?
「だーっはっはっは！　こりゃ傑作だぜ！」
ジャックはお腹を抱えて笑い転げている。
「だ、抱っこしてもいいのかな……」
リオンが頬を赤らめながら両手をわきわきと動かすと、ジル君は「めっ」とそっぽを向いた。
リオンはガクッと肩を落とす。
「フィンは良いのに、俺はダメなのか……」
そんなリオンをなだめるように、フィンがこうフォローを入れる。

「俺も、ついさっき抱き上げたらやっと噛まれなくなったんだ。それまでは噛みつかれてしまってここまで連れて帰ってくるのも大変だったさ……」
「マジかよ……」
えっと、保護したての野良犬かな？
くろすけが『おーい、ジル君やーい』とふざけて念話を送ると、ジル君はむっすーとしたままくろすけを見下ろして、「じじー」と呟いた。
どうやら念話は届いているみたい……
「ひとまず、お店、閉めますかね……」
驚きながらも冷静なトーマの一言に、みんなは一斉にうんうんと強くうなずく。
錬成堂グランキャットの入り口には、急遽『臨時休業』の張り紙がされた。
みんなで二階のリビングへと移動する。
エミリアがパーシー君を抱き上げると、パーシー君は「きゃっ、きゃっ♪　えみみあ」と途端にご機嫌に。
エミリアもエミリアで、「お兄様……可愛いわ……！」と、デレデレだった。
一方でラグマットの上でころんとお座りしているジル君の前に、僕とくろすけも座る。
「……パパ？」
恐る恐るそう話しかけると、不機嫌そうな顔のまま「あい」と返事が返ってきた。

「ジル君って呼んでいい？」
「ん」
ジル君は小さくこくんとうなずく。
あれ、不機嫌そうではあるけど、ちょっと可愛いんだけど……
「ジル君、おいで」
僕がそう言って両腕を広げると、ジル君も「ん、ん」と両手を伸ばしてくれた。
えっ、僕はいきなり抱っこしていいの……!?
噛みつかない……!?
よいしょとジル君を抱っこすると、ジル君はむっすーとしながらも、おしゃぶりをきゅぽんと外して「のえう」と言ってくれた。
「あーっ、今、ノエルって言った！　ジル君可愛い！」
「のえうー」
相変わらず顔は不機嫌そうだけど、もしかしたら本当に不機嫌なわけではなくて、そういう顔なのかもしれない。
そんな僕たちを見たフィンは疲れ切ってソファで脱力していた。
「さすがはノエル君……」
「あはは、フィン、お疲れ様……」

トーマやリオンがみんなにお茶を出してくれて、みんながリビングのソファに集う。
「クリス様。何があったのか、詳しくお伺いしても……？」
そう優しく尋ねるエミリアに、クリスティーナは申し訳なさそうに「はい、もちろんです」と返事をした。
まず、クリスティーナからみんなへ、女神の神託の内容が伝えられた。
「英雄とか、小さな災難っていうのは、そういうことだったのね……」
エミリアが納得するようにうなずいていた。
そして、クリスティーナがこう提案をする。
「ノエル。よろしければ『記憶の万華鏡』をお借りしても？　わたくしの記憶を見ていただくのが、一番早いかもしれません」
「そうだね。待ってて、持ってくる」
『記憶の万華鏡』は、僕とくろすけがみんなに手伝ってもらって作った、すんごい魔導具。
僕の超能力の力が込められていて、万華鏡を向けた人の記憶を追体験できるんだ。
僕は自分の部屋から記憶の万華鏡を持ってくると、ここにいるみんなにクリスティーナの記憶を投影した。

◇

僕たちの頭の中に映し出されたのは、広いお屋敷の一室。
綺麗に着飾った人たちがたくさんいて、お父さんもラインツ王国公式の正装をしていて、かっこよかった。
「クリス様。あそこにいらっしゃるの、ヴァレンティア魔道伯じゃないか？」
お父さんが向こうに見える優しそうなおばあさんへ視線を向ける。
「本当ですね。わたくし、ご挨拶に行ってきますね」
「俺たちも行くか。パーシー」
「うるさい黙れ。貴様に言われなくともご挨拶に伺う予定だったさ」
「へいへい……」
フィンが隣で苦笑いしている。
多分、クリスティーナも苦笑いしているんだろうなって思う。
「イリーナ様！」
クリスティーナたちがおばあさんへ呼びかけると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。
「まぁ！　クリスティーナ殿下！　まぁまぁ、こんなにご立派になられて……お忙しかったでしょ

うに、来訪、心より感謝申し上げます」
それから『イリーナ・ヴァレンティア魔道伯』と、お父さんたちが挨拶を交わしていた。
イリーナは、今回の研究発表を行う『ヴァレンティア魔道研究所』の責任者をしているらしい。
そして、クリスティーナが念のため女神の神託の内容を彼女へ伝えた。
「迷宮の妖精の暴走……！　まぁ、それは大変……！　カルちゃん、何か失敗してしまうのかしら……とっても良い子だから、カルちゃんに限って何かしてしまうってことはないとは思うのだけれど……」
イリーナは心配そうに言う。
カルちゃんっていうのが、迷宮の妖精なんだね。
というか本当に、迷宮の妖精っていたんだ……
「あの、それでしたら良いのです。無礼を申してしまい、申し訳ありません。これは、決して国からの正式な言葉ではございませんので、どうか……」
クリスティーナが必死にそう言うと、イリーナは優しく「ふふふっ」と笑った。
「まぁまぁ、殿下、本当にご立派になられましたね。大丈夫ですよ。わたくしどもを想って、善意で伝えてくださったのですよね。そうですね……本来の予定では、実はどなたか二名の方に今回の研究内容の体験をしていただく予定でいたのです」
「二名……！」

クリスティーナが驚いたように言う。
小さな災難が降りかかるのも、二人だ。
「もしかしたら、カルちゃんが張り切ってやり過ぎてしまうのかもしれません。本日は各国のご要人にお集まりいただいている大事な場ですので、その体験は念のため見送りましょう。でしたら、暴走というのも防げるでしょう」
「わたくしの戯言にお付き合いいただき、申し訳ありません。ですが、それが良いかもしれません」
……あれ？
ちゃんと未然に対策してるよね……？
なんで、二人の英雄は小さくなってしまったんだ……？
「これで大丈夫ですね」などと言いながら来賓席に戻っていくクリスティーナたち。
実際に、魔道研究発表会が始まった。
ダンジョン構造を利用した『魔法の本』の研究成果が披露される。
魔法の本が転送装置となっており、本の中に入り込んだ人たちがその世界の住人となって、架空の世界を楽しめるというものだ。
迷宮の妖精『カルドゥラ』がストーリーテラーとなって、話を盛り上げてくれるらしい。
こんな事態でもなければ、すごく楽しそう……

大人のみんなも童心にかえって楽しめるよう、本の中へ転送されると自動的に子どもの姿になるんだって。
子どもたちだけの架空の世界が広がるダンジョン。
それが、今回の目玉だったんだ。
各国のお客さんたちもみんなすごく楽しそうに聞いている。
そうだよね、僕も、魔法の本、体験してみたいよ。
――しかし、事は起こったのである。
舞台の真ん中に展示されている魔法の本が、突然不自然に輝き始める。
「まぁ、なにごと……!?」
イリーナをはじめ研究者一同も驚いていて、お客さんたちにもその不安が移っていく。
そして、魔法の本がより一層強い輝きを放った、その時だった――
お父さんとパーシヴァルの二人が跳び上がり、魔法の本に向かって攻撃を放つ。
本から放たれた光が二人を包み込むが、二人の攻撃が光を相殺し、消し飛ばした。
「うぅ、ぐずっ……えみみあ……」
「あぅ……」
床に降り立った二人は、赤ちゃんになっていたのであった。
そっか、お父さんとパーシヴァルは、その場のみんなを本の光から守ったんだ……！

8話　謝罪と究明

記憶の万華鏡の投影が終わると、みんなはジル君とパーシー君を褒めちぎった。
一階でピンポーンとチャイムが鳴ったため、トーマが「俺、出るよ」と階段を駆け下りる。
「ジル君、パーシー君、おりこーさん！」
僕はジル君とパーシー君を順番によしよしする。
「あい」
むすっとしたまま片手を挙げて返事をするジル君。
「うぅ、ぐずっ……」
なぜかめそめそしているパーシー君。
「だけど、せっかく未然に防ごうと努力したってのに、結果、お告げ通りになっちゃったんだねぇ。いや、だからこそ、お告げ通りですんだとも言えるかねぇ」
アイラがしみじみ言う。それに対しエミリアがこう続いた。
「ええ、きっとそうよ。未然に防ごうと努力をしたおかげで、この程度で収められたのかもしれないわ。ジルさんもお兄様も、お告げがあったから即座に対応できていたのかも。もしかしたら、発

表会の来賓全員が赤ちゃんになってしまった未来だってありえたのよ」

みんながうなずこうとした、その時――

「うむ、エミリアの言う通りだ」

その威厳ある声に驚き振り返ると、そこに立っていたのは、ラインツ国王だった。

「おーさま!?」

僕をチラッと見て、「おーさま、来ちゃった♪」とお茶目に笑う。

隣にはすっかり落ち込んでいる、記憶にいたおばあさん、イリーナの姿もある。

わざわざマギラナからここまで来たのか……！

トーマが小さな声で「びっくりした……」と言いながら階段を上がってきた。

そりゃ、自分の家に国の王様が「来ちゃった」とか言って訪ねてきたらびっくりだよ。

みんなが一斉に立ち上がり頭を下げると、ラインツ国王は「やめい、やめい。そんなことをしてもらうために余は来たのではない。余は――」と言いかける。

そして、パーシー君とジル君を順番に抱き上げた。

「おぉ、おぉ……愛いのう、愛いのう。余は、この子たちに会いにきただけなのだ」

「ふぇ……えみみあ……」

パーシー君が怯えた様子で、ラインツ国王の腕の中から必死にエミリアに手を伸ばす。

「やっ……」

立ち読みサンプル
はここまで

ジル君は眉間にしわを寄せてうんざりしたような顔をしていた。

ちょっと赤ちゃん受けはよくないみたいだね!?

まぁ、噛まれないだけマシかも……

イリーナが、申し訳なさそうに一歩前に出る。

「……ご家族の皆様、この度は誠に申し訳ございませんでした」

彼女は深く頭を下げた。

そっか、イリーナはこうやってラインツ国王のところにも謝罪に行っていたのか。

みんな、なんと言えばいいのか分からないのか、黙ってしまっていた。

その沈黙を破ったのはジャックだった。

「ま、こいつらが進んでやったことだしな」

「パパたち、ずっと赤ちゃんのまま……？」

僕がそう尋ねると、イリーナは懸命に首を横に振った。

「いえいえ。とんでもございません。現在、お二方は、『幼児化』の状態異常がかかってしまっているのです。魔法の本の中では『年少化』が常にかかっている状態となるのですが、それの上位版なのです……」

『ほう！　確かに二人とも「幼児化」というステータスになっておる。まさかそんな状態異常があったとは、驚きじゃな……』